

Newsletter

2021年（令和3年）

4月例会

日時：4月17日（土）14時より

講師：日本女子大学 内山加奈枝

題目：「文化」としての少女の病

—— *Girl, Interrupted* にみられるフロイト受容から考える ——

司会：千葉大学 佐藤宗子

5月例会

日時：5月15日（土）14時より

講師：東北公益文科大学 呉衛峰

題目：現代中国語圏短詩型における俳句の影響について

司会：日本大学 呉川

7月例会

日時：7月17日（土）14時より

講師：日本大学（元教授） 福島昇

題目：トニ・モリスン『青い眼がほしい』におけるシェイクスピア『ハムレット』表象の変遷——オフィーリアとピコーラの関係を中心に——

司会：東京大学（名誉教授） 井上健

9月例会

日時：9月18日（土）14時より

講師：立教大学（非常勤） 小倉康寛

題目：『悪の花』におけるアルス・コンビナトリア

司会：日本大学 椎名正博

2021年（令和3年）3月15日発行

INSIDE THIS ISSUE

1. 4月・5月・7月・9月例会案内
- 2-3. 支部活動の今後に関して
- 4-5. 例会要旨等
- 6-7. 東京支部短信

幹事会開催のお知らせ

第1回幹事会

2021年7月例会後、オンラインにて開催します。

（幹事会構成員は、幹事、支部長、事務局長、各種委員会委員長、会計、会計監査です）

役員連絡会開催のお知らせ

2021年4月、5月、および9月例会終了後、7月は13時より、オンラインにて開催します。（役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、会計を含む事務局委員、各種委員会委員長です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します）

2021 年 3 月 15 日

支部活動の今後に関して

東京支部 支部長 佐藤宗子

2021 年に入りましたが、昨年よりのコロナ禍は、2 月現在、首都圏は緊急事態宣言下にあるなど、一向に終息の気配が見えません。

そのような状況にある中で、東京支部では 2020 年度の活動がほぼ全面的に休止となりました。支部役員選挙と支部総会をオンラインで実施し、ニュースレターを発行し、『研究報告』の投稿募集を締め切り延長で行ったほかは、例会・大会がすべて実施できませんでした。支部会員の皆様には、停滞していることをお詫び申し上げます。

この間、活動の方向性としてオンライン化を検討してきました。他支部に比べて、支部会員数が極めて多いことを考えると、手順や方法などを慎重に考えざるを得なかったことも遅くなった一因です。そして、新年度に向けて、以下のような方針を幹事会に諮り、賛同を得ることができました。支部会員の皆様にお知らせし、記憶にとどめていただきたいと思います。

- 1 2021 年度例会および大会を、オンライン開催とする。
- 2 従来、紙媒体で発行していたニュースレターは、129 号を最後とする。ニュースレターが果たしていた会員向け連絡・案内の機能は、基本的に、ホームページの更新と支部会員一斉メール通知により代替させることとする。なお、必要があれば葉書等による連絡を行うことはある。
- 3 2021 年度の支部大会は、10 月 16 日（土）開催予定とする。

なお、オンライン開催の方法は、Zoom 契約を念頭に置いていますが、これについては予算を伴うことでもあり、3月幹事会で諮り、その後、利用の仕方については周知することになります。また、ニュースレター129号の発送業務は、現今の状況に鑑み、印刷所に委託しての発送となります。年度替わりに差し掛かる時期ですが、連絡先の変更がある方は、なるべく早めに事務局にご連絡ください。

また、上記の2に関連し、改めてご自身のメールアドレスを事務局に通知してあるか、ご確認ください。今後は、メールアドレス宛に一斉メールで連絡をいたします。従来のニュースレターに掲載されていた例会や大会の案内、研究発表の要旨、あるいは予定の変更などは、すべてメールによる連絡となります。流動的な状況に対応していくためには必要なこととご理解くださるよう、お願いいたします。

2021年度からは、例会もオンラインで再開します。支部大会も秋に予定されています。皆様の活動への積極的な参加を、心よりお待ちしております。

4 月 例 会 発 表 要 旨

「文化」としての少女の病 ——*Girl, Interrupted* にみられるフロイト受容から考える——

日本女子大学 内山加奈枝

スザンナ・ケイセン (Susanna Kaysen 1948-) の *Girl, Interrupted* (1993) は、ヴェトナム戦争に揺れる 60 年代後半、2 年にわたり精神病棟で過ごした自身の体験を、25 年の歳月を経て記した回想録である。本作は、白人中産階級の少女が精神を病むという文脈において、シルヴィア・プラス (Sylvia Plath, 1932-63) の *The Bell Jar* (1963) の系譜をひく思春期文学であり、20 世紀最後の年、ジェームズ・マンゴールド監督により同名タイトルにて映画化された。

回想録では、ケイセン自らの疑念——入退院に際しての医学的根拠の曖昧さ——が一貫して問われ、個人の体験であるはずの病が、女性と狂気を結びつける近代医療によって均一化される過程が示される。一方、映画では、ケイセンのフェミニスト的体制批判は影を潜め、少女が集団生活を通して病から脱していく成長物語に書きかえられている。また、原作にみられるフロイトの精神分析や近親相姦のタブーに関する言及は、誇張される形で映画に取りこまれ、アメリカにおけるフロイト受容の大衆化を顕著に反映している。おりしも、ケイセンの回想録が出版され、映画化された 90 年代は、幼少期に性的虐待を受けたという（偽りの）記憶を、セラピーの誘導により取り戻した娘が父親を告発する訴訟が多発した。そうした社会現象を反映するかのように、映画では、病を語る少女こそが、ある種の魅力を放つ存在として描かれる。

本発表では、ケイセンの回想録、映画化作品を中心に、同時代の少女文学、精神医療の言説を参照しながら、フロイトが放棄した誘惑理論が 20 世紀後半のアメリカで再熟した要因を考察するとともに、個別に発症する病が集団的病理（少女が病む文化）として形成されていく過程を示したい。

5 月 例 会 発 表 要 旨

現代中国語圏短詩型における俳句の影響について

東北公益文科大学 呉衛峰

中国語現代詩における俳句の影響については、1920 年前後の「小詩運動」以降の長い空白を経て、中国本土では 1980 年に始まった「漢俳」および台湾における 1990 年前後の「俳句ブーム」をその端緒と見てよからう。「漢俳」のような日本伝統俳句の移植が実践される一方、いわゆる「俳句的瞬間」、つまり俳句の詩的精神のみに着目し、中国語現代詩に取り入れる試みも存在する。

1987 年の戒厳令解除から間もなくの 1990 年前後から、台湾では俳句ブームが興ったのを受け、当時まで散発的だった台湾や東南アジアの短詩型中国語詩が多くの人に実験されるようになった。台湾の詩人・芸術家の陳黎 (1954 -) による『小宇宙——現代俳句一百首』(1993 年)、『小宇宙Ⅱ——現代俳句一百首』(2006 年)、『小宇宙 & 変奏——現代俳句 266 首』(2016 年) の無題三行詩がその代表である。

2000 年以降、台湾と東南アジアの華人圏では短詩型現代詩が様々な定義と形式に則って絶えず実践されてきた。2015 年、中国本土で流行り出した四行以内の無題短詩型「截句」が、「俳句美学に基づき、瞬間的観照を切り取る（中国語：截）」ことを標榜して反響を呼び、翌 2016 年十九部の「截句詩叢」が出版されるや、対岸の台湾では白靈 (1951 -) らが中心となる台湾詩学季刊社が 2017 年、十五部の「截句詩集」を詩社成立 25 年記念として出版した。

「現代俳句」にせよ、「閔小詩」にせよ、「截句」にせよ、おおかたモダニズムの詩的手法を用いた短詩型であり、内容も多岐に渡る。政治的理由で欧米と比べてかなり出遅れたとの印象はぬぐいがたく、日本俳句への誤解も多々あるが、世界文学という視点から見れば、最短詩型としての俳句の文学理念がグローバル的拡散の中で如何に受け入れられ、変形させられたかを考察する好材料となるに違いない。

7 月 例 会 発 表 要 旨

トニ・モリスン『青い眼がほしい』におけるシェイクスピア『ハムレット』表象の変遷 ——オフィーリアとピコーラの関係を中心に——

日本大学（元教授） 福島昇

本発表では、オフィーリアとピコーラをイノセンスの視点から比較・検討し、『青い眼がほしい』が『ハムレット』の主題の一つであるイノセンスをいかに表象しているのかを考察する。

モリスンは『青い眼がほしい』の中で、「ソープヘッドはオフィーリアにたいするハムレットの毒舌を選んで記憶したが、……」と、オフィーリアとハムレットに言及している。クリス・ロアークは『ハムレット』の犠牲者オフィーリアと『青い眼がほしい』の犠牲者ピコーラには重要な類似点があると主張する。ロアークはイノセンスの視点からオフィーリアとピコーラの類似性と違いを指摘し、『青い眼がほしい』は人種問題が絡み、『ハムレット』よりも一層複雑でダイナミックな世界を構築していると言う。モリスンはアメリカ文学が誇る無垢の主題を描くために、『青い眼がほしい』の好対照として西洋悲劇の『ハムレット』を選んだ。ハムレットは「デンマークは牢獄だ」と言い、クロードディアは「この土はある種の花には合わないのだ」と言う。『ハムレット』には、「いまの世の中は関節がはずれている」という悲劇的状況が背景にあり、『青い眼がほしい』には、「アメリカン・アフリカニズム」（白人が黒人を邪悪とみなす誤解、白人が勝手に作り上げた黒人像）が背後にある。このように、『青い眼がほしい』は人種・民族、文化、美と醜といった問題を織り交ぜ、自然主義の姿勢と写実的な作風が際立つ小説であり、シェイクスピアの『ハムレット』と相互につながりあっている。時代背景は異なるが、オフィーリアとピコーラとの間には深い影響関係がある。モリスンはオフィーリアのイノセンスを『青い眼がほしい』の中で、アメリカ的に変容させるのである。

9 月 例 会 発 表 要 旨

『悪の花』におけるアルス・コンビナトリア

立教大学（非常勤） 小倉康寛

複数の草稿を時間軸で並べ、作品が決定稿という到達点へと向かうプロセスを描く生成研究は、比較文学で基盤となる手法の一つであるだろう。これは精神分析と異なる視角で、エクリチュールの語り手としての作家が生まれる過程をも透視する。しかしこの時、一つの作品に対して、一つの主体を対応させることが研究の前提となっているように思われる。草稿それぞれが、別々の主体を模索している作品が存在する可能性はないのだろうか。本発表ではシャルル・ボードレー（Charles Baudelaire, 1821-1867）の『悪の花』（*Les Fleurs du mal*, 初版：1857, 第2版：1861）について、拙著『ボードレーの自己演出』（2019）を起点に、この問題を考える。

本発表が「作品」と呼ぶものは、詩篇ではなく、詩集という詩篇の集合体である。福永武彦が示唆し、のちにM. リヒターが大冊で具体的に読み解いてみせたように、『悪の花』第2版は語り手「私」に関する物語として読むことができる。だがボードレーはその発表までに、多数の異なる詩群を発表した。詩群はそれぞれが、語り手「私」に関する別の物語を提示するものであった。つまり『第2版』は完成形として、全体をまとめるものではない。プレ・オリジナルとされる詩群はそれぞれが別の企図で作られている。

ヴァリエーションは、同じ材料（＝詩篇）の組み合わせを変えることで生み出されている。順列組み合わせを利用したこの手法の原点には、ライムウンドス・ルルスに端を発し、エドガー・アラン・ポーにまでみられる「アルス・コンビナトリア」があるだろう。だがボードレーは独特である。彼は自分の経験を詩として記録し、詩の順番を入れ替え、自らの人生に「ありえたかもしれない」主体を模索したと読める。これは不遇続きだった自分への慰めであるばかりではなく、自らを理想に向かって作り替え、「作品」として高めていこうとする新プラトン主義の思想へと連なる営為だったのではないか。

東京支部短信

今後の例会運営に関するお知らせ

① 例会開催の概要は、これまでニューズレターで年2回、3月と9月にお知らせしてきました。今後は、同様の頻度で、ホームページに情報を掲載する予定です。3月15日には4月からの次年度上半期（4月～9月）、9月15日には年度下半期（11月～3月）の例会情報（日時、発表者名および題目、要旨）を掲載します。

② 2021年度のオンラインによる例会開催については、当面、以下のように連絡する予定です。

該当月の例会開催日の1週間前に、支部会員向け一斉メールで、開催内容（ホームページ掲載と同様）とともに、当日Zoomに入室するためのURLを送付します。その際、ホームページにも、会員に入室用URLを送付した旨を掲載しますので、メール不着の場合は事務局にご連絡ください。

③ 例会開催時は、従来配付していた発表者の資料は、画面共有で見えることを基本とします。発表を希望される方は、パワーポイントやワードなどで、当日の資料を作成することをご了解ください。なお、資料は、発表原稿そのものではないものとします。また、発表者は、音声のみの参加ではなく、カメラ使用を基本とします。

④ Zoomへの入室は、メールで送付された入室用URLをクリックすれば可能です。当日の参加に際しては、発表中はカメラ・音声をオフにさせていただきます。

第59回東京支部大会研究発表者募集

2021年10月16日（土）予定、第59回東京支部大会がオンラインで開催されます。研究発表を希望される方は、氏名、住所・連絡先（電子メールアドレス）、所属、発表題目、400～600字程度の発表要旨をメール添付で、6月5日（土）必着で事務局（hikakubungakutokyo@gmail.com）までお送りください。発表時間は25分、質疑応答が10分です。発表希望の方は、オンラインであることをご理解のうえ、お申し込みください。なお、申し込み受付の返信をお送りしますので、ご確認ください。

具体的な発表の形態等については、今後、東京支部ホームページに掲載します。

*支部大会開催日が確定しましたら、東京支部ホームページにてお知らせいたします。また、開催日に変更があった場合にも、東京支部ホームページにてお知らせいたします。

東京支部短信

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への投稿について

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』は、原則として毎年一回、11月末日に発行されます。研究論文投稿資格を有する者は、本学会員で、前年および前々年に開催された東京支部例会または東京支部大会において研究発表や講演を行った者とします。投稿論文の提出期間は8月16日から8月31日まで送付先は下記の通りです。

日本比較文学会東京支部編集委員会委員長 椎名正博 pegasus@w2.dion.ne.jp

詳しい投稿規定および執筆要領、投稿用のテンプレートは東京支部ホームページに掲載されていますので、どうぞご覧ください。ご質問がある方は支部事務局に電子メールでお問い合わせください。

月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局（hikakubungakutokyo@gmail.com）に氏名、所属、題目、連絡先（メールアドレス、電話）を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送でお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分（質疑応答を除く）です。

東京支部事務局より「お知らせ」の配信について

東京支部では支部会員のみなさまにメールマガジンの「お知らせ」をお届けしています。原則として毎月1日発行で、例会や支部大会などの情報を掲載しています。これまでお手元に届いていない方は、日本比較文学会東京支部の支部会員のページの「お知らせ」のウェブサイト（<https://www.hikakutokyo.com/mm>）のフォームにご記入のうえ「配信希望」をクリックして下さい。メールアドレス変更の場合も、お手数ですが、新アドレスで再登録をお願いします。

日本比較文学会東京支部ニューズレター129号

発行人：佐藤宗子

編集委員会（編集担当）

委員長：椎名正博

委員：鈴木美穂 高柳聡子 永井久美子 堀江秀史 安元隆子

事務局

事務局長：堀啓子

事務局委員：川野礼音 小泉泉 土田久美子 南平かおり

芳賀理彦 畑中健二 蒔田裕美 森本真一

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒259-1292

神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学 文化社会学部 文芸創作学科

堀啓子研究室

TEL: 0463-58-1211(内線3275)

E-mail: hikakubungakutokyo@gmail.com